みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

SER no.063; 序文

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚田, 誠之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/1926

序　　文

塚田誠之

中国と東南アジア大陸部諸国との国境地域において現在，国境の相対化が加速され，市場経済やグローバリゼーションが進展するなかで，国境に跨って居住する諸民族集団は以前にも増して複雑な問題となっている。本書は，中国と東南アジア大陸部の双方から個別の民族集団を照射し，文化人類学・歴史民族学・言語人類学の諸方面から実地調査に基づく多面的な比較研究を行うことで，国境地域に居住する諸民族の文化の動態の解明を試みたものである。検討された内容は大きく分けて，国境地域の民族の動向とその文化，民族の社会変動・文化変化，民族の文化復興運動・文化再生・文化振興，民族をめぐる歴史的動向，民族の言語・文字の歴史と現状，の5つに分類される。

まず，国境地域の民族の動向とその文化について，范宏貴「中越、中老跨国境民族研究」は国境を越える民族「跨国境民族」とその居住地，相互の交流について検討している。中国とベトナム・ラオスの国境を越えて居住する民族について，まず，その名称・それぞれの国家における対応関係・居住状況・移住史・言語を概観し，ついで1980年代の「改革開放」期以降におけるそれら民族の経済をはじめとするさまざまなレベルの交流について具体例を挙げながら論じている。中国・ベトナム・ラオスの間で同系民族の移住が歴史上頻繁に行われたことが現在の居住状況を生んでいること，それら国境地域の多くの人々が親戚・朋友関係にあり，交易や行事・婚葬，宗教儀礼などのさまざまな機会に国境を越えて往来し交流していることが挙げられている。また1949年以降，「文化大革命」など中国で重大な政治運動や経済危機が生起すれば国境地域の住民はラオスへ行き，ラオス側での生活が不安定になれば中国に戻るという，いわば国家を相対化するような動きがあったことが指摘されている。

次に民族文化のうち民間信仰・儀礼を扱ったものに杨光远「哀牢山下傣族的原始信仰」がある。雲南省新平イ族タイ族自治県のタイ族の伝統的な「巫術」の諸儀礼が取り上げられている。儀礼は，自然村レベルで行われ，旧暦2月の祭神儀礼，「寨鬼」を村から追い払う儀礼，6月24日の「祭山鬼」儀礼，病気の原因とされる「白虎精」を追う儀礼，死者の魂を呼んだり天上に送ったりする儀礼が提示されている。

さらに，玉康「西双版纳傣泐民居建筑与信仰习俗」でも民間信仰が扱われている。西双版納のタイ・ルー族の伝統的民居は高床式の「竹楼」建築である。その建築の起源に関する伝承を押さえた上で，建材（材木）の切り出し・運搬に関わる習俗，建築用地を選ぶ際の習俗と儀礼，建築の際の禁忌，新居に入居するときの習俗と民間歌手ザンハ（章哈）の建築に関する歌の内容，民俗知識からみた民居の状態の良し悪し，家に入るときや家の中での禁忌等，民居建築と民居をめぐるさまざまな習俗・民間信仰が詳細に紹介

されている。あわせて現代化の影響，ビルマ・ラオス・タイ等からの国境を越えた影響が指摘されている。

続く *Then*- A Shamanistic phenomenon of the Tay in Vietnam.（Ngo Duc Thinh）も民間信仰を扱っている。タイー族特有の民間の宗教的職能者テーンに関して，カオバン省・ランソン省などベトナム北部各地での事例を挙げて検討している。テーンの儀礼はシャーマニズム的行為であり，憑依をともなう。人々は病気治療，平穏，幸運，占いなどを願う。タイー族の民間信仰習俗を概観したうえで，テーンの起源と属性，テーンの儀礼をめぐる諸問題（儀礼の過程，テクストの伝承，歌，音楽・楽器，踊り，動作，帽子や服の色とその意味など）が検討されている。興味深いのは，テーンの儀礼には，土着の民俗信仰と道教・仏教・儒教との混合的な要素が見られ，うちタイー族の場合とくに道教信仰の影響が強いこと，この点でベト族の影響を受けながらもタイー族のもとでは古代のテーンの形をとどめていることであり，諸民族文化の交流の動態がそこに窺われる。

続く大西和彦「ベトナムの雷神信仰と道教」は，ベトナムにおいて雷神信仰が道教の雷神と結合して普及したことを経典・儀礼書などの歴史文献によって解明するとともに，その背景として歴史上ベトナムにおいて中国から伝播した道教の原形が他の宗教や信仰と混在することなくかなり厳密に保たれ，長く教団道教が存在し道教勢力が社会に浸透していたであろうことを挙げている。

民族の社会・文化のなかで「姓」を手がかりに論じたのが樫永真佐夫「黒タイ村落における姓の継承と個人呼称」である。ベトナムの黒タイ村落における個人呼称と姓の継承の現状について，黒タイ文字で記された系譜資料とベトナム西北部とタイ中部の黒タイ村落での実地調査から検討し，姓が村落内の社会的分節や個人の識別のためにほとんど意味を持っていないこと，姓が父系ラインで継承されることから親族関係が父系的に規定される黒タイの文化的独自性を強調する作用を持っていることが指摘されている。とともに近年のキン族との交流にともなうキン族の文化的影響の受容が示されている。

同系の民族が国境を越えて居住し相互に交流を行ってきたことは先の范宏貴論文で示されているが，個別の民族を取り上げて文化の比較と交流の実態の解明を試みたのが，塚田誠之「中国広西壮（チワン）族とベトナム・ヌン族の民族間関係――文化の比較と交流を中心として」である。中国広西の壮族とベトナムのヌン族との文化の異同，および諸般にわたる交流について検討されている。文化については衣食住，婚姻習俗，生育習俗，年中行事が扱われている。交流については，国境貿易やその他の交流が取り上げられている。なお，ヌン族はもとは広西からベトナムへ移住した来歴を持つ。検討を通じて，両者の文化に共通点が多く見られること，ただしヌン族の側によりふるい習俗が残されたり，移住先のベトナムで独自に発展したと推測される要素もあることが示される。さらに両国の間が国境で区切られたものの1980年代を主体とする国境貿易への関与

や人々が日常の生活において国境を越えて往来していることが示されている。

ここで民族の社会変動・文化変化に移ろう。それは近年顕著な現象であるが，変化の要因として国境を越えて居住する諸民族間相互の交流，経済発展，観光化現象，文化の商品化，文化政策，多数派民族の影響などが挙げられる。まず，観光化や文化の商品化にともない，民族の文化的適応をめざして「民族文化生態村」が近年，中国各地で建設されているが，それについて論じたのが尹绍亭・李继群「旅游生境与文化调适——丘北县仙人洞村的调查研究」である。「旅游生境」という概念を提示したうえで民族の文化適応との互動関係について，「雲南民族文化生態村」の試験点である丘北県普者黒風景名勝区の仙人洞を事例として検討されている。「旅游生境」とは観光業が発展して形成された特殊な具体的環境で，多くの力が作用し不断に変化する複雑な環境を示す概念である。まず，「景観」の開発，行事の再創造など仙人洞において著者が率いる「文化生態村建設項目組」によるさまざまな取り組みが紹介される。ついで，文化の商品化とそれに対する文化の保護や再創造の問題が議論される。文化の商品化は危険で避けるべきものとして位置づけられている。そして，民族文化生態村の理念を挙げて，観光と経済・文化の互動の持続発展的なメカニズムを確立することが可能であることが示されている。観光業の甚大な影響の下での文化適応がいかに重大な課題であって，「旅游生境」の形成と当地の民族の文化適応がいかに多くの要素が作用する複雑な過程であるかが示されている。

観光化と民族文化との関わりについては，さらに長谷川清「エスニック観光と「風俗習慣」の商品化——西双版納タイ族自治州の事例」で検討されている。西双版納タイ族自治州における1980年代以降の観光化および観光開発の変遷過程を挙げて，そのなかで少数民族タイ族の伝統文化や風俗習慣がどのようにして商品化され観光用の民族文化として新たな価値が付加されていったのかが検討されている。観光開発はとくに1990年代に地元の政府が密接に関与しながら進められてきた。そして観光化の進展に応じて，「民族風情」や「民族文化」が新たな消費文化として普及し開発の対象となる傾向，タイ族の側における漢族的な生活習慣への移行，宗教信仰の希薄化・世俗化など現在の諸問題が示されている。

社会変動・文化変化において，多数派民族の影響も大きな契機である。先の樫永論文ではキン族の文化的影響の受容が示されているが，中国では漢族の存在が国境地域でも重要である。国境地域では，さらに多民族の相互の影響による多元的文化の形成が見られる。この点について検討したのが韓敏「建築物・装飾・歴史からみる国境地域の多元的文化——雲南省騰衝県和順郷の事例研究に基づいて」である。雲南省国境地域の騰衝県和順郷は華僑の故郷で，古い建築物の保存状態が良好である。そこの建築物（住宅・公共建築）の建築様式と機能・歴史を押さえたうえで，建築様式において漢文化を主体に他民族や西洋文化をも吸収した多元性が認められること，そしてその多元性をもたら

した諸要因が論じられている。国境地域の漢族地域において，中国と他の国々，あるいは漢族と他の諸民族との出会いのなかで作り上げられてきた多元的文化の実態が提示されている。

ここで民族の文化復興運動・文化再生・文化振興の問題に移る。まず，袁少芬「中越边境民族文化振兴与经济互动的考察」は，中越辺境地域における少数民族の文化振興と経済の「互動」の問題が，経済発展の程度と文化的特徴の異なる6地点の事例から論じられている。当該課題はフォード基金の項目として3年の月日を要し多くの「課題組」成員が関わった大規模なプロジェクトである。豊富な文化資源を持ちながら経済的には貧困に直面したり，あるいは経済的には成功したが伝統文化の「流失」の危機にある少数民族が取り上げられる。本稿ではそのうちのキン（京）族の事例が主に取り上げられている。すなわち京族は改革開放後に多角経営の成功により貧困から脱したが，伝統文化が流失の危機に瀕するようになった。その京族の民族の文化資源を保護・開発するために「課題組」が,「京族文化開発センター」の建立,京族文化展示場の建立,チュノム（字喃）・独弦琴の習得の訓練，郷土教材の編纂による伝統的文化知識の習得，伝統的文化活動と組み合わせた観光路線の形成など諸般にわたる実践的な取り組みをしたことが紹介されている。地域によって方法の違いはあるが,「課題組」の取り組みはほかに,品牌（ブランド）産品の開発や「科学」農法の実験（憑祥市友誼辺村),「希望小学」を作り入学率を高めたり成人教育を行い，男女平等を宣伝し，さらに民族の文芸祭を実施して閉鎖的な人々に自文化に対する自覚を得させること（那坡県水弄苗族村）など多岐にわたっている。いかに文化資源を利用するのか，いかに伝統文化の流失に対応するのか，研究者を中心とした実践的な取り組みがなされている。

文化復興の動きについて論じたのが，続く Reproduction of Yao Culture: A Case Study of Pien Hung Shrine at Ban Huey Chang Lod in Northern Thailand. (Mongkhol Chantrabumroung)である。近年のタイ北部のヤオ(ユーミエン)の文化復興の動きとして，とくに Pien Hung（槃瓠）廟の建立の動きとその背景を中心として，Chiang Lai 省 Ban Huey Chang Lod を舞台に検討している。ヤオ族の信仰や村の概況をふまえたうえで，この数十年間のタイ政府の対ヤオ族政策の推移について，山地民の社会経済調査・政策と管轄部門，森林保護政策，インフラ整備，学校でのタイ語教育の浸透等が論じられ，ヤオ族側における世代間のギャップや，耕地不足・債務・失業・ドラッグ問題等，彼らが直面しているさまざまな社会･文化上の問題が指摘される。そしてそうした背景のもとで，いかなる機能を持って槃瓠廟が建てられているのか示されている。

伝統的な文化が変化し民族内部の世代間ギャップや伝承母体そのものの変化が見られるなかで民族側の新たな取り組みが見られる。この点についてタイ北部のヤオ族（ユーミエン）を事例として検討したのが吉野晃「タイにおけるユーミエン（Iu Mien）の文化

復興運動概況」である。1970年代以降，タイ語環境が圧倒的となりユーミエン（ヤオ）の若い世代で漢語・漢字になじまない人口が増加し，それにともない儀礼を司る祭司数が減少し後継者が不足するようになった。こうしたユーミエンの「伝統文化」消滅の危機感から，1990年代にユーミエン文化の復興へ向けた動きが顕在化してきた。そうした動きとして，山地民族の教育・文化振興を援助するNGOが漢字教習プロジェクトを実施することで関与し，また各村落でも漢語・漢字の教習に取り組むようになったこと，近年，ユーミエン文化そのものを教えることに力点が移りつつあることが示されている。

次に民族をめぐる歴史的動向に移る。武内房司「20世紀初，ヴェトナム西北タイ族社会の変容と抗仏運動」は，国境地域の民族集団と統治権力との関わりを描き出している。ヴェトナム西北部シプソンチャウタイにおいて自律的な地域権力をもったタイ族の首長デオ氏の動向を中心として，デオヴァンチの死後の20世紀初期の時期におけるフランスの統治下のシプソンチャウタイのタイ族社会の変容について，フランス海外公文書センターに所蔵されている関連文書を通じて検討している。越南光復会系のヴェトナム人革命家らの抗仏運動，滇越鉄道建設と運行のために徴募された多数の越僑の存在にもふれながら，20世紀初期におけるフランス植民地当局の介入・統制の強化とそれにともない経済的に従属し政治的に追いつめられていくタイ族首長の動向が示されている。

最後に，民族の言語・文字の歴史と現状について，张公谨「中国傣族与国境外近亲民族的语言和文字——历史、现状和前途」では中国雲南と境外のミャンマー，ラオス，タイ，ベトナム，インド東北部のタイ系言語と文字について，歴史・現状・展望を概観している。まず，6カ国のタイ系言語はともに古代の中国南方～インドシナ半島の「百越」に起源し，歴史上，漢語やサンスクリット・パーリ語を吸収しながらも，言語の核心部分においては古来の特徴を保持したことが論じられる。そして，中国国境外のタイ系民族の言語は中国国内のタイ語の各方言のいずれかに近いこと，文字形式においても近いものがあること，中国のタイ族の言語・文字状況が国境外のタイ系民族のそれにも影響を及ぼしてきたことが論じられる。さらに，現在，若い世代が主体民族の言語を学ぶ趨勢のもと民族語が危機を迎えているなかで，どのように民族の文化遺産たる民族語を保存していくのかが展望されている。

国境地域には諸民族が錯綜して居住し，歴史的にも現在的にも他民族とのさまざまな交流を経て文化形成を行ってきた。さらに，近年の経済発展・観光化にともない，民族文化が商品化や開発の対象となり，文化変化が急速に進行し，そのなかでそれぞれの国家における政府や研究者側からの民族の文化適応をめざす取り組み，あるいは民族側からの文化復興・文化遺産の保存を模索する新たな取り組みが着手されつつある。それら国境地域の民族文化の実態と交流のありようを解明し文化をめぐる新たな動きを追求することは，民族文化の現状を理解し将来を展望するうえで意味のあることである。民族

文化の今後の動向が注視されるところである。